

新潮文庫

いずこより

瀬戸内晴美著



新潮社

い ず こ よ り

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草144 C

昭和四十九年九月三十日 発行
昭和五十年二月十日 三刷

著 者 瀬戸内晴美

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

いずこより

瀬戸内晴美著



新潮社版

2212

い
ず
こ
よ
り

第一章

いつの頃から、その二本の線路が私の記憶の底に棲みはじめたのであろうか。月も星もないのに、夜の闇に仄かな明るさが滲んでいる。その底に、鉛色のなめらかな鋼鉄の肌を、それ自体から燐光を発しているようなほの白さで冷え冷えと光らせ、線路は闇を縫い裂き、どこまでも走っていた。草も、樹も、家も、その背景にはなく、ただ闇だけが、遠くへいくにつれ濃く艶めきながら拡がっていた。

私たちは、その線路の上を歩いていったのだろうか。それとも、その横に添った路をたどっていたのか。私を背負っている母の足もとは、時々乱れ、時にはつまずき、その度私は、母の背中で、頬を母の肩にうちあてる。母があやうくつんのめる時は、軽い私の軀は、母の背で他愛なく弾み、母の首筋を超え、髪のアたりまで顔がうちあげられる。母の背はあたたかく、柔かく、弾力があった。それに母の冷い髪にふれる時のこそばゆい快さ……それらの記憶は、あの二本の線路と同じ時に生まれたものなのか。

もうひとつの、母に背負われている時の記憶は、人気のない淋しい道をたどっていた。片側に、赤土色の土塀がどこまでもつづいている。その時の母も、時々足もとを乱し、私はその背でふいの衝撃をうけては小さな軀を弾ませ、ふり落されまいとあわてて母の背にしがみつくのだった。

母は時々、重い溜息ためいきをもらした。ほうっと小さな声になって唇を破るほど、母の溜息は大きかった。うなだれて、足もとをみつめながら歩いている母は、もしかしたら泣いてでもいたのだろうか。

いつからともなく、時々思いがけない時に、思いがけない場所で、ふいに臉まぶたの裏をかすめるその闇の中の線路の幻影は、必ずしも失意の時や、悲哀に沈んでいる時にあらわれるとはかぎっていなかった。華やかな場所へゆくため、盛装し、車にゆられている時とか、賑にぎやかに友人にとり囲まれ、陽気な笑い声の中で愉たのしい団欒だんらんをしている最中など、ふいに、目の中が翳かげり、闇の線路がしらじらとつづくのが見えてくる。

そんな時、誰に気づかれるひまもなく、一瞬の後には、目の裏に浮んだ幻影をす速くかき消してしまっている。もちろん、硝子ガラスの壁の中になげこまれたような、何の手がかりも足がかりもない虚ひなしい淋しさにつつまれている時にも、一步も足をふみだす気力も萎なえしぼんだような心身の疲労の極にも、その幻影は無遠慮にあらわれてくる。気まぐれに、全く一方的に訪れるその幻のもつ意味を、私は未だかつて、一度も真剣に見つめ考えてみようとしたことはない。

幼時に無意識のうちに心の襞ひだの中に奥深くたたみこまれてしまっている無数の記憶の中から、なぜか、その情景だけが執拗しつように浮び出てくる。母の背の感触や、母の溜息の伝わってくる感覚は、もつと後になって記憶され、それが線路の記憶にどこかでふつと結びつけられたのかもしれないかった。

人生というものが、決して華やかな陽の照る大道を歩くことではなく、闇に近い暗さの中を、うなだれて、とぼとぼとたどっていく果しない道のりだということを、母はその生涯の経験の中

から、子供に肌で教えこんでいったのかもしれない。

後になって、あの道の母の背で味った凍りつくような淋しさと怖ろしさが忘れられないと母に話した時、母は、はっと顎^{あご}を引き、あの時は辛いことがあって、死のうかと思いつめ、夢中で私を背にくくりつけて家をぬけだし、歩いていたのだという。私の記憶の中の暗い道は、そこを抜けてしまうと、もう引きかえす氣力がなくなりそうで、何度も行きつ戻りつしていたところであったという。

「あの頃、あんたはことばの遅い子供で、まだ片こともろくに喋^{しゃべ}れなかったのが、あの道で、突然、おれろれろれろと、節をつけて歌うようにいいだしてねえ、言いだすとやめなくて、まるで子守歌のように背中でもいいつづける。私もつい、つりこまれて、その口調にあわせて、おれろれろれろとあやしているうちに、氣持が静まってきて、家に帰る氣になってね」

母は唇をまるく突きだすようにして、おれろれろれろと喋^{しゃべ}ってみせた。

その時から二十余年がすぎていた。幻の記憶の線路に重なって、もうひとつの線路のある風景が新しく私の記憶に重なっている。大人になっている私は、自分の脚で土を蹴^けるようにして歩いていた。私は母のようにうなだれてはいなかった。むしろ、昂然^{こうぜん}と首をあげ、薄い肩をそびやかすようにして大股^{おおまた}に歩をはこぶ。同じなのは、行手にどこまでも灰色の二本の線路がのびているということだった。私は背に、見られている意識を凝らせていて、歩みを止めることも、歩調を乱すことも出来なかった。

厳冬の東京の空は鉛色に低くたれこめていて、太陽も病んだように生色がない。線路ののびている背景の町は、暗く、間口もせまく屋根も押しつぶれたように低い家々がつづいていた。

東京の場末の尾久という町。二月の初めの風は冷く、頬も首も寒さに鳥肌だつてくる。そのくせ胸は灼けるように熱く、耳も頬も燃えている。ふりかえることは出来ない。ふりかえった瞬間、前に進んでいる脚が、一気に後へかけもどるのはわかりきっている。

夫に抱かれて、娘が無心な目をあげ手を振って、私を送ってくれている。

「ママ、いつてらっちゃい」

ようやくまわりはじめた舌でいいながら、小さな手を振りつづける。娘は夫に私が病院へいくのだといいきかされたのだ。私の右の目は白い眼帯で掩われていた。夫が力まかせに固めたこぶしでこの目を突くほど、夫を激昂させたのは二日前のことだ。いさかいの直接の原因はとるにたらぬほどささいなことだった。

その前日、故郷の姉から、父のインバネスを直してつくり、送ってくれたオーバーの型を、みっともないと夫がけなし、それに私がさからった。普通の夫婦の間でなら、何でもなく笑い話で交わされる会話が、すでに半年以上も心の歯車をくいちがわせている夫婦の仲では、すべて深刻な意味を帯びてくる。私は夫の言外に、実家や肉親への輕蔑を読みとったと思い、夫は私の横柄な口答えに、押えつづけ、がまんしつづけている不貞な妻への、日頃の正当な怒りの堪忍袋の緒を切ってしまう。

夫の軀と夫の拳がいきなり飛びかかってきた時、私はとっさに事態がのみこめず、ぼんやり無防禦に夫をみつめていた。そのみひらいたままの右の目から、火花がちり、軀は仰のけに突きとばされていて、頭をしたたかに壁に打ちつけた。気を失わなかったのは、打ちつけた後頭部の痛さのためであり、同時に目から流れだした血のぬらついた感触の不気味さと、思わず押えた掌に

べつとりとついてきた血の色のあまりの鮮烈な赤さのためだった。私も夫もその瞬間まで、その場に小さな娘がいたことを全く忘れていた。

「パパ……ばか、ばか」

娘の疳^{かんだか}高い叫び声が、ほとんど自失していた私たちの意識を同時に呼び覚ました。娘は小さな軀^{まり}を毬のように弾ませ、夫の脚に打ちかかっていた。夫は座敷の真中に突ったって、部屋の隅まではね飛ばされ、ぼろ屑^{くず}のようにうずくまり、血にまみれている私を呆^{あつけ}気にとられたように見下していたが、自分の脚にしがみついて、小さな拳でうちかかってくる娘を見ると、いきなり、その軀を抱きあげて激しく抱きしめた。そうされたまま娘はまだ夫の頬を打ちつづけた。

つい二日前のそんな激しい経験も、まだ三歳の娘には一晩も記憶には止まっていけないふうだった。父と母が、傍^{そば}にいるというだけで、娘はすぐ安心しきった表情になり、夫がいつものように勤めに出かけた後では、片ことの歌を歌いながら、隣りへ遊びに出かけていったものだった。その日から眼帯をかけた私の顔にも見馴れ、娘は、自分も「白いめがね」をかけたがったりした。

娘が、私に手をふって行かせてくれた病院とは、娘の小さな頭の中では、その前々日、私が「かさね」のように腫^はれ上った目を濡れタオルで押えながら、娘をつれて訪れた近所のわびしい眼科医院だったのだらう。その医院は、私の今歩いていく線路ぞいの道を反対にとり、夫と娘の立っている地点よりまだ数百^{イム}米^{メートル}後方に位していた。三歳の娘に方角の観念はまだ生まれていず、私の歩いていく線路の涯^{はて}に、私と共に行ったあの暗い医院が映ってるのだらうか。

私は進駐軍から流れたうす緑のブランケットを染め直して仕立てたコーヒー色のズボンをはき、その上に、同じ材質でつくった薄紅色のジャケットを着ていた。さっきまではその上に例の黒い

不吉なオーバーを着ていたのだったけれど、どうしても別れさせてくれという私の声をだまって聞いた後で、夫はいった。

「オーバーをぬいで行け」

愕おどろいて夫の顔をみつめ直した私に夫の声がかぶさった。

「そこまで決心したなら、着のみ着のままで行け」

私はうなずいてその不恰好なオーバーをその場でぬぎ、畳んで道の傍の石の上に置いた。

「マフラーもとりなさい」

夫の声にうながされ、それをオーバーの上に重ねた。その手でポケットから財布をとりだして重石おもしのように上に置いた。文字通り着のみ着のままになって、夫と娘の立っている傍から歩きだした。

い　　ず　　こ　　よ　　り

道は線路に添ってどこまでも続いている。右側には、住宅がつづき、左側には工場がまばらに建っていた。晴れた日でも、その辺一帯は、どこか薄曇ったような暗い感じのする土地柄だった。湿気た沼地の上に建っているようなみすばらしい都営住宅の家並が、押しつぶされたような惨めさで並び、一ひねりでつぶれてしまいそうな安っぽいその建物の一つの、更にその一室に、私たち親子は、もう二か月近く身を寄せあっていた。

すでに一年あまりも、私たちは自分たちの巢を真剣に探すことを怠っていた。先ず、巢づくりから始めるべき家庭というものが、夫と私の間では根底からゆらいでおり、本気で家探しをする前に、家庭を支える柱をうちたてる地盤の地固めから、やり直さなければならぬ状態だったのだ。

娘は北京^{ペキン}で生れて以来、一処に落着く閑^{ひま}もなく転々と居を移したので言葉を覚え難かった。北京語であやしてくれた阿媽^{アマ}のことばが耳にしみこんだ頃、引揚げて四国の田舎町へ移り、その土地のなまりの強い古風なことばが、ようやく耳馴れた頃、また東京へ移っている。娘は、聞きわけけることは聴^{きこ}くなくても、自分でことばを選ぶときは、通ってきた町々の、それぞれにちがうことばに混乱させられるらしく、何かいいかけては、小さな唇をまるく突きだすだけで、ことばは出さず、やがて口をしっかりとへの字に結んでしまうのだった。その上、私という母親は、娘がことばを覚えようとする頃から、夫でない男と恋におち、じぶんひとりの物想いに捕われてしまい、世間の母のように、やさしく、添寝の時に子守唄を歌ってやったり、おとぎばなしを聞かせてやったりするということとはなくなっていた。私は娘とふたりきりでいる時、啞^{おし}になったようにひっそりと口をつぐみ、自分の心の奥ばかりを執拗^{しつねつ}にのぞきみつめていた。心の奥は泡立^{あわだ}ちあふれ、いつでも激情がしぶきをあげて渦まいていような激しさだったので、いっそう私の表情や動作は無感動をよそおい、面のように表情を硬^{こわ}ばらせ、動作は深海の底を歩く人間のように、緩慢で物静かになっていた。

心が凝りすぎるせい、指の先まで神経はゆきわたらなくなり、手にしたものをぼろぼろ落してしまい、指からすべり落ちた物が、激しい音をたててくれる時、はじめてはっと目覚めた表情にかえったりするのだった。

娘はそういう私のそばで、ひっそりと、ひとり遊びをする癖をいつのまにか覚えこみ、全く世話のやけない子供に育っていたが、まるで鏡のように私の神経の動きを敏感に映しとり、私の秘めた喜憂の影をはっきりとそのつぶらな瞳^{ひとみ}に反映させるのだった。

そんな頃、おとなしく世話のかからない娘が、ふいに魔にみいられたように夜泣きの癖をつけてしまった。私の胸の中で乳房をしっかりと握りしめながら、一度は必ず、眠りにおちていくのに、二時間もすると、針でつつかれてるように鋭い声をあげて泣きむせぶ。そうなれば、どんなにあやしても娘は泣きやまず、昼間のあの聞きわけのいいおとなしさはどこかへ消え去り、か細い背骨を折れそうなほど撓め、顔を真赤に力ませて、握りしめた自分の爪で掌を破りそうに軀じゅうで苛だつ。深夜の道に、私は泣き叫ぶ娘を背負い、そつとぬけだしてゆく。月のある夜も、星座の光る夜も、私にはそれらの夜々がいつでも闇に近く感じられた。冷たい外氣にふれると、娘は泣き声を次第に柔げ、やがて笛のように咽喉を鳴らしはじめ、ひくっひくつと、すすり泣きの声をとぎれがちにもらしながら、いつのまにか泣きやむ。そのくせ、歩みをとめると、また、針にさされたような鋭い泣き声を呼びもどす。泣き声が消え、泣きじゃくりがすっかり弱まり、やがて、おだやかで愛らしい寝息が、私の背を暖かくくすぐるまで、一時間でも二時間でも深夜の道を歩きつづけなければならぬ。月も星も仰ぐ姿勢は忘れ、終始私は首うなだれ、白いアスファルトの道や、露地の石畳や、夜露にしめった柔かい土の道をあてもなく歩きつづけた。

遠い昔、母の背にゆられながら、母の心の嘆きを肌で吸いとったことがあったように、娘も、もしかしたら、愚かな母の嘆きを無心の瞳に映しとり、柔かな肌から吸いとってしまったのかも知れない。私かうなだれて歩く母の姿を、心の記憶に焼きつけているように、娘も、深夜の道の私もうなだれた背を、心の襷に縫いこめているのではないだろうか。

数多くの引越や、長い集結生活や、引揚船の不如意な何日かの中から、娘は疲れて眠くなると、くるつと、どこにでも身を丸め、まるで小犬や小猫が眠るように、頭も手足も自分の胴の中に抱

きこんで、風呂場の簀の子の上でも、台所の床の間でも、廊下の片隅でも、寝ころがってしまふわびしい癖をつけていた。そんな娘も、やはり私の背の上での眠りには、いっとう安らぎを覚えるらしい。

魚の背のように光る二本の線路の幻影は、こうして二重写しになって、瞼の裏で重複し、過去のすべてを、その二筋の、尽きる果もない線路にのせ、どこまでも遡らせ、あらゆる過去の時間と、場所と、事件と、心情の綾や翳りまで、なまなましくよみがえらせてくる。それは一卷のフィルムを映写機で映し、物語の筋を追うようなよみがえり方ではなく、暗黒に閉ざされた舞台の一部に、いきなりどこからともなくまるい照明があてられ、そこにある瞬間の静物や、人物の表情や姿勢などがくっきりと写しだされるという現われ方だった。照明の光の輪は舞台の闇を螢火のようにならふわと飛びかい、その度、その光の輪の中には、過去のある瞬間の情景や心理がくっきりとあらわれる。ひとつひとつの光の中の事件や人物は、時間と場所の関連が全くとぎれてるように見える。そのくせ、記憶の中では、その途方もなく離れ離れで、ちぐはぐな情景が、ほぐしようにないほどに入り乱れて、混乱して、もつれてみえる記憶の網目の中では、互いに引きあい、しっかりと糸と糸の端がつなぎあっているのだ。

一九四四年の夏、娘を産んだ時、私は二十二歳だった。多くの娘たちがそうであるように、何の理由もない他愛ない憧れから、三十代で死にたいと、娘時代には切望していた。十九や二十の娘にとって、三十代は女の盛りに見え、秋薔薇のたわわなまめきとはかなさと、何よりも夕映のような華麗で淋しい輝きがあった。それにくらべて、四十代の女の佛というものは、ひたすら現実的な台所臭い匂いや、生活の垢やしみに汚されているようで、憧れを誘われなかった。十九

や二十の娘にとっては、女の四十歳も五十歳も同じで、六十歳や七十歳はもう人間ではないような老醜しか想像されなかった。

今、私はいつのまにか娘の二倍をすぎる人生を生きのびているというのに、自分の年齢が信じられないし、一向に自分の人生の重みがその生きてきた歳月にふさわしいという実感がわかない。娘を産んだ二十二歳の私と、その二倍を生きた今の私にどれほどの差があるというのだろう。肉体は、正確に律儀に、歳月の足あとを刻みつけている。かつては、か細い薄い胸にせめぎあうように重々しく豊かにみのり、両の掌に支えきれずあふれていた乳房は、今は片掌にひっそりとおさまってしまう。熟した桃のような手応えのある瑞々しさみずみずしさと固さを指に伝えてきた乳房は、今はマシマロのような手ざわりの柔かさしかとどめていない。何の味わいもなく鉛筆を立てたようにすぽっと伸びていた娘時代の軀は、腰が張りだし、肉がつき、紡錘型の魚のような型に変わってしまったっている。いくら眠っていても眠りたいたということのなかった眠りが、その半分の睡眠時間でも何とか保つようになっている。手入れをしないままにのび放題にのびて、いつのまにかほどくと腰を掩うまでになった髪は、まだうるさいほど密生している。けれども、ある朝、ふと鏡の中に映った一房の白髪のきらめきは、ぞっとするような鮮かさで、私を狼狽ろうばいさせてしまった。頭を中心部に近く、内側にかくされていたのでつい見落していたらしいその一房の白髪は、抜くと、たいした抵抗もなく手に残った。しなやかで細い黒髪とは別人のもののように硬く、ぴんと筋ばった白髪は、根本から先端まで一点の濁りもない見事な銀色に輝いていた。私はその銀髪をくるくる指にまきつけてみた。私のしらないまにひそかに私を裏切っていたその白髪は、それ自体としてはあまりの美しさに輝いていて、見つめる感情は混乱してしまう。一瞬、全髪銀色になった

自分を鏡の中に空想してみる。その時には、首筋でふつりと切り揃えるか、もっとさっぱりシングルカットに刈りあげて、額の片ほうの一房を華やかな紫色に染めあげてみよう。そして、明るい薔薇色の服を着よう。そんな空想が脳裡をかすめるのもつかの間で、私はやはりこの銀髪に裏切られているような納得し難い不満がこみあげてくるのである。視力はもっとひどかった。それだけは誇りにしていた視る力が、友人の誰よりも早く老眼の徴しをみせはじめ、それは年と共にひどくなる一方で、今では、新聞の字が眼鏡なしでは淡墨を流したようにしか見えない。

三十すぎの頃から十年近く愛しあったことのある男は、私より一廻り以上も年上だった。男はある日、唇もとに曖昧な微笑を浮かべ、

「本当をいってやろうか。新聞の字が、この距離じゃ、淡墨を流したようなんだよ」

そういって、膝の新聞を両腕をかくく曲げて顔の前にひろげてみせた。男の年齢に甘やかされ、男の年齢にいたわられつけていた私は、男が告白する男の老いさえなつかしく、いそいそと声を弾ませて誘った。

「どうしてかくしてるの、さ、すぐ眼鏡買いにゆきましようよ。あたしとちがってそんなに鼻が高いんだもの、おっこちることはないでしょ」

いった後ですぐ、もっと同情すべきだったのかとあわてて、声をひくめ、

「実はね、あたしも時々、物がぼんやりみえるし、目が始終しばしばするのよ。もう老眼なんじゃないかしら」

共犯者めいた薄笑いで男に媚びるように囁いた。もちろん男は私の老眼説など一笑に付してしまった。